

中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（8）

北野山遺跡

2009

財団法人 広島県教育事業団

例 言

- 1 本書は、平成18（2006）年度に調査を実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う北野山遺跡（三次市吉舎町敷地所在）の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査及び整理作業・報告書作成は、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。
- 3 発掘調査は、渡邊昭人、岩本正二（現・財団法人東広島市教育文化振興事業団埋蔵文化財センター）が担当した。
- 4 出土遺物の整理・復元・実測・写真撮影、図面の整理は、渡邊が中心となって行った。
- 5 本書は、渡邊が執筆・編集した。
- 6 本書で使用した遺構の表示記号は次のとおりである。
S A : 柱穴列, S B : 掘立柱建物跡, S K : 土坑
- 7 遺物実測図の土器の断面は、須恵器は黒ヌリ、土師器は白ヌキである。
- 8 図版と挿図の遺物番号は同一である。
- 9 本書に使用した北方位はすべて平面直角座標系第Ⅲ座標系北である。
- 10 第2図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000地形図（上下・吉舎）を使用した。



目 次

I	はじめ	(1)
II	位置と環境	(4)
III	調査の概要	(7)
IV	遺構と遺物	(10)
V	まとめ	(18)

挿図目次

第1図	中国横断自動車道尾道松江線路線図	(1)
第2図	北野山遺跡周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)	(5)
第3図	周辺地形図 (1 : 2,000)	(8)
第4図	遺構配置図 (1 : 200)	(9)
第5図	SB 1, SA 1 実測図 (1 : 80)	折込み
第6図	SB 2 実測図 (1 : 80)	(11)
第7図	SK 1 実測図 (1 : 20)	(12)
第8図	北端ピット実測図 (1 : 10)	(12)
第9図	出土遺物実測図 (1) (1 : 3)	(15)
第10図	出土遺物実測図 (2) (1 : 2)	(17)

表 目 次

第1表	中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧	(3)
-----	---------------------------	-----

図版目次

図版1	a 遺跡遠景 (東から) b 全景 (調査前, 北東から) c 同上 (調査後, 北東から)	図版3 出土遺物 (1) 図版4 出土遺物 (2)
図版2	a SB 1, SA 1 (南西から) b SB 1, SB 2 (北東から)	

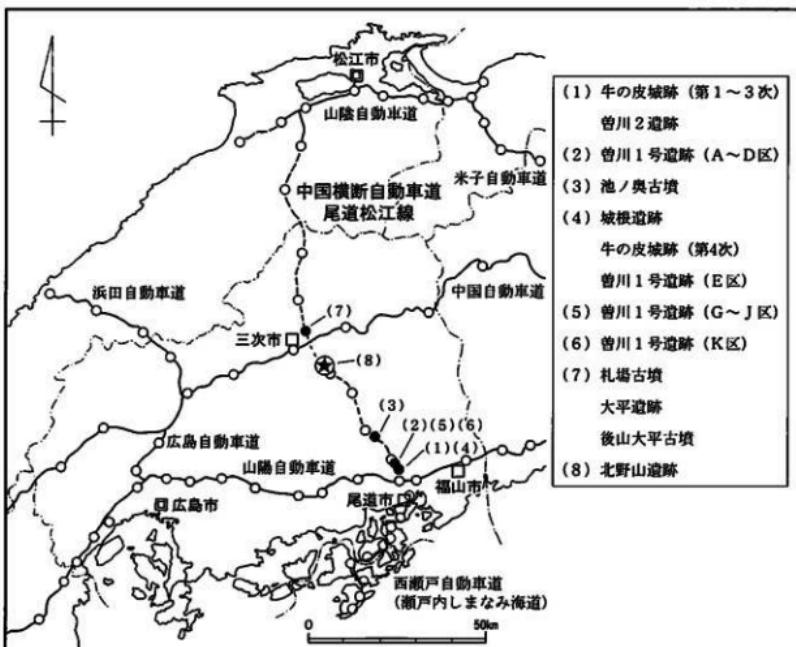
I はじめに

北野山遺跡の発掘調査は中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴うものである。本事業は、本州四国連絡道路尾道今治ルート（瀬戸内しまなみ海道）と一体になって、山陰、山陽及び四国地方を南北に結ぶ地域連帯構想を推進し、本圏域の産業、経済及び文化の発展と沿線地域の生活向上に寄与しようとするものである。

日本道路公団中国支社（以下「道路公団」という。）は、平成13（2001）年2月、当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについて、広島県教育委員会（以下「県教委」という。）と協議した。県教委はこれを受けて現地踏査を行い、平成14（2002）年9月事業地内に試掘調査が必要な箇所が存在する旨を回答した。

その後、日本道路公団は解散し、平成17（2005）年10月1日に中国横断自動車道尾道松江線建設事業は西日本高速道路株式会社に引き継がれた。

県教委は平成17（2005）年11月に当該箇所の試掘調査を実施し、北野山遺跡の存在を確認した旨を同年12月に西日本高速道路株式会社中国支社（以下「西日本高速」という。）に回答した。こ



第1図 中国横断自動車道尾道松江線路線図<(1)～(8)は報告書番号>

の遺跡の取扱いについて県教委と西日本高速は協議を重ねたが、設計変更による現状保存は不可能との結論に達した。西日本高速は、平成18（2006）年2月9日付けで三次市教育委員会（以下「三次市教委」という。）あてに「埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）」を提出し、三次市教委は同年2月16日付けで西日本高速あてに工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。中国横断自動車道尾道松江線建設事業は平成18年度から国土交通省の直轄事業となるため西日本高速にかわり国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所（以下「国土交通省」という。）が、平成18年3月2日付けで財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室（以下「教育事業団」という。）に北野山遺跡の調査依頼を行った。国土交通省と教育事業団は同年4月3日付けで委託契約を結び、教育事業団は同年7月3日から8月4日までの約1か月間発掘調査を行った。

本報告書は、以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり、今後の埋蔵文化財の資料として、またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして、少しでも寄与できれば幸いである。

発掘調査にあたっては、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所、西日本高速道路株式会社中国支社広島工事事務所、三次市教育委員会及び地元の方々に多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

第1表の報告書

- (1) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曾川2号遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（1）』 2005年
- (2) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）曾川1号遺跡（A～D地区）』 2006年
- (3) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（3）池ノ奥古墳』 2007年
- (4) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（4）城根遺跡 曾川1号遺跡（E地区） 牛の皮城跡（第4次）』 2008年
- (5) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（5）曾川1号遺跡（G～J地区）』 2008年
- (6) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（6）曾川1号遺跡（K地区）』 2008年
- (7) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（7）札場古墳・大平遺跡・後山大平古墳』 2009年
- (8) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（8）北野山遺跡』 2009年

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧

報告書	遺跡名		地区名	調査期間	所在地	時期	内容			
(1)	牛の皮城跡 (北郭群)	第1次	竪状堅堀群	平成15年1月20日～3月14日	尾道市御調町大町宇二の丸	中世	城跡			
		第2次	1～4郭	平成15年7月7日～10月31日						
		第3次	西堅堀	平成15年11月10日～11月28日						
(2)	曾川2号遺跡			平成15年1月20日～3月7日	尾道市御調町大町宇吉川	古代末～中世	集落跡			
	曾川1号遺跡	A地区	旧・平成14年度調査区	平成14年10月21日～平成15年1月17日	尾道市御調町大町宇吉川	弥生時代～中世	集落跡			
		B地区	旧・P2第一調査区	平成15年4月7日～5月23日						
		C地区	旧・P2第二調査区							
		D地区	旧・P1	平成16年1月6日～2月5日						
(3)	池ノ奥古墳			平成16年8月23日～10月28日	世羅郡宇摩戸宇天神	古墳時代後期	古墳			
(4)	城根遺跡			平成15年1月27日～3月7日	尾道市御調町大町字城根	古墳時代か	箱式石棺			
	牛の皮城跡 (北郭群)	第4次	5郭	平成18年1月30日～2月24日	尾道市御調町大町宇二の丸	中世	城跡			
	曾川1号遺跡	E地区	旧・P4	平成15年12月1日～12月19日	尾道市御調町大町宇米田	绳文時代後期～中世	遺物包含層			
(5)	曾川1号遺跡	G地区	旧・P3	平成16年6月7日～8月6日	尾道市御調町大町宇吉川・米田	弥生時代～中世	集落跡			
		H地区	旧・P3側道							
		I地区	旧・P4側道	平成17年1月11日～3月4日						
		J地区	旧・P2							
(6)	曾川1号遺跡	K地区		平成17年4月11日～7月1日	尾道市御調町大町宇吉川・米田	弥生時代～中世	集落跡			
(7)	札場古墳			平成17年11月21日～平成18年1月27日	三次市後山町字札場	古墳時代後期	古墳			
	大平遺跡			平成19年6月21日～10月5日	三次市後山町字大平	弥生時代後期～古代	集落跡			
	後山大平古墳			平成19年6月21日～10月5日	三次市後山町字大平	古墳時代後期	古墳			
(8) 本番	北野山遺跡			平成18年7月3日～8月4日	三次市吉舎町字敷地	平安時代	仏教開運の施設跡			

II 位置と環境

北野山遺跡は県北東部の三次市吉舎町に所在する。吉舎町は三次盆地の南東端に位置し、町域の約80%が山林で、耕地は約10%である。町の中央を馬洗川が、北東端を上下川が北流し、耕地（沖積平地）はこの二つの川とその支流沿いに帶状に分布する。

吉舎町には多くの古墳があり、中世には和智氏の城下町が形成され、その後も山陰と山陽を結ぶ交通の要所として栄えた。ここでは吉舎町内の古墳時代以降の遺跡を述べていくこととする。
古墳時代 この時期の遺跡には古墳と集落がある。

古墳は数多く確認されている。大部分は径10m程度の円墳で、複数の古墳が近接し群を形成するものや単独で存在するものがある。町内全域に分布するが、その大部分は北部に集中する。特に矢野地・海田原・三玉には径30m以上の大型古墳があり、この地域の中心であったと思われる。前期の古墳はわずかで、中期の古墳が多く、横穴式石室を埋葬施設とする後期の古墳は少ない。県史跡三玉第1号古墳⁽¹⁾（三玉）は全長41mの帆立貝形古墳で、墳丘斜面に墓石を3段にめぐらせる。各段には平坦面があり二段目の平坦面と、同じ高さの方形壇上に埴輪をめぐらせる。埋葬施設は竪穴式石室で、副葬品には変形文鏡、珠文鏡、筒形銅器、玉類、有孔円盤、鉄斧、鎔、鉄刀、短甲、兜、轡、矛、鐵鎌、砥石などがある。築造は出土遺物から5世紀後半とみられる。下矢井南第4号古墳⁽²⁾（敷地）は径18m、高さ2~3mの円墳で、埋葬施設は5基確認されている。このうち墳頂近くに並行した4基からは、それぞれ鉄刀子2点・豎櫛1点、鉄刀子1点・鉄劍2点、鉄鎌1点・鉄斧2点・鉄刀子1点・鉄劍1点・豎櫛1点、豎櫛1点が出土した。また、墳頂部で筒形石製品1点と土師器片も出土した。4世紀末から5世紀初頭の築造である。大番奥池第1~3号古墳⁽³⁾（敷地）は6世紀前半頃の古墳群である。いずれも円墳で、径は8~11mである。第2号古墳では木棺墓を2基検出した。北側の木棺墓から刀子1点、鐵鎌3点、鐵鎌1点、用途不明鉄製品1点が、南側の木棺墓から須恵器杯身3点、杯蓋1点、鐵鎌1点が出土した。第3号古墳の埋葬施設は木棺墓2基、土坑墓1基と後世のかく乱を受けた1基である。いずれの木棺墓からも須恵器杯身1点、杯蓋1点が、土坑墓からは刀1点、鐵鎌4点が、かく乱を受けた埋葬施設からは刀子1点が出土した。片野中山古墳第9~12号古墳⁽⁴⁾（敷地）は5世紀末から6世紀前半頃の古墳群で、いずれも円墳で、径は約8~10mである。第9・10号古墳では木棺墓の可能性が高い各1基の埋葬施設を確認し、前者からは鐵鎌と有孔砥石が、後者からは刀子が出土した。焼東古墳⁽⁵⁾（矢井）は径8mの単独で存在する円墳で、埋葬施設は木棺墓2基、石蓋土坑墓1基である。出土遺物から築造時期は6世紀前半とされる。なお、知和の寺津第3号古墳は県内で数少ない前方後方墳であることが調査の結果判明し、同一丘陵上に位置する寺津第1・2・4~6号古墳群とともに現状保存されている。

古墳以外でこの時期の遺物がみつかった遺跡には、徳市遺跡、敷地本郷遺跡、八斗田遺跡、三田戸遺跡（安田）がある。三田戸遺跡は土坑が検出され、土師器・須恵器が出土しており、古墳時代から奈良時代の集落跡と思われる。



第2図 北野山遺跡周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

1 北野山遺跡	2 敷地本郷遺跡	3 片野中山古墳群 (15基)	4 煉古墳
5 煉東古墳	6 大番奥池古墳群 (6基)	7 明神山古墳群 (17基)	8 下矢井北古墳群 (7基)
9 八幡山北古墳	10 一之渡古墳群 (3基)	11 田尻古墳群 (4基)	12 土井古墳群 (2基)
13 矢野地古墳群 (45基)	14 八幡山古墳群 (30基)	15 中山古墳群 (19基)	16 下矢井南古墳群 (5基)
17 矢井中山古墳群 (12基)	18 間ノ采古墳	19 宮前古墳群 (2基)	20 後口山古墳群 (4基)
21 海田原古墳群 (33基)	22 日暮目古墳	23 三玉古墳群 (9基)	24 善遊寺山古墳
25 右谷遺跡	26 赤城跡	27 福原土居館跡	28 片野古墓
29 馬乗山城跡	30 城山城跡	31 矢野地土居館跡	32 殿平山城跡
33 平松山城跡	34 南天山城跡		

古代 『和名抄』によると、平安時代初め三谷郡には三谷・松部（私部の誤記と考えられる）・江田・額田・刑部の五つの郷があったとされる。吉舎町は上安田・知和地区が甲努（奴）郡に、徳市が世羅郡に属していた以外は三谷郡に属し、私部郷に含まれていたと考えられる。

この時代の遺跡は集落、墓、寺跡がある。右谷遺跡（敷地）では7世紀前半から8世紀前半の竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、土坑4基を検出した。竪穴住居跡は一辺約5mの方形で、掘立柱建物跡は2間×2間（3.6m×4.7m）の規模である。土坑のうち1基は、須恵器壺を直立てて据え置き、須恵器杯身で蓋をし、さらにその上に平らな礫を乗せていた。また、右谷遺跡に隣接する片野中山第9号古墳の墳丘外の北東斜面では、8世紀頃の土師器壺を埋納した墓坑が確認されている。そのほか八斗田遺跡や三戸田遺跡でこの時期の遺物が採集され、上安田廃寺跡（上安田）で古代末から鎌倉時代初めにかけてと考えられる瓦がみつかっている。

中世 高野山領の大田庄から三次・山陰へのルートにあたり、物資や人が集まり宿駅として栄えた。また、この時期に大きな影響力を及ぼしたのは、武藏國から下向した広沢氏の分家・和智氏である。建久3（1192）年三谷郡12郷の地頭職を得た広沢氏は和知（三次市）に移住し、13世紀後半には和智・江田の両氏に分かれた。和智氏は三谷郡北部を領有し、その後吉舎へ本拠を移した。戦国期には尼子氏の配下となるが、その後毛利氏に転じる。この時期に和智氏の南天山城の周辺は町人が定着し城下町、宿場町として繁栄した。

この時代の遺跡としては城館跡、墓、寺跡がある。城館跡としては平松城跡（三玉）、南天山城跡（吉舎）などが確認されている。平松城跡は1365年に和智氏が築いた城とされ、その後戦国期に大規模に拡大される。南天山城跡は和智氏が本拠とした山城とされる。墓では和智誠春墓（丸田）や和智勝之墓（清鋼）などがある。寺跡では建物跡が残る県史跡吉寺廃寺跡（桧）・上安田廃寺跡がある。

註

- (1) 吉舎町教育委員会『三五大塚古墳』 1983年
- (2) 財団法人広島県教育事業団 広島県立歴史民俗資料館「中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る備北地域埋蔵文化財発掘調査報告会－資料－」 2008年
- (3) 財団法人広島県教育事業団 広島県立歴史民俗資料館「中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る三次市域埋蔵文化財発掘調査報告会－資料－」 2007年
- (4) 註(2)と同じ。
- (5) 吉舎町教育委員会『燎東古墳』 1995年
- (6) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「寺津古墳群」「灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)」 1994年
- (7) 註(2)と同じ。

参考文献

- ・ 平凡社『日本歴史地名大系第35巻 広島県の地名』 1982年
- ・ 角川書店『角川日本地名大辞典34 広島県』 1987年
- ・ 広島県教育委員会『広島県遺跡地図録（甲奴郡・双三郡）』 2002年
- ・ 吉舎町教育委員会『吉舎町史（上巻）』 1988年

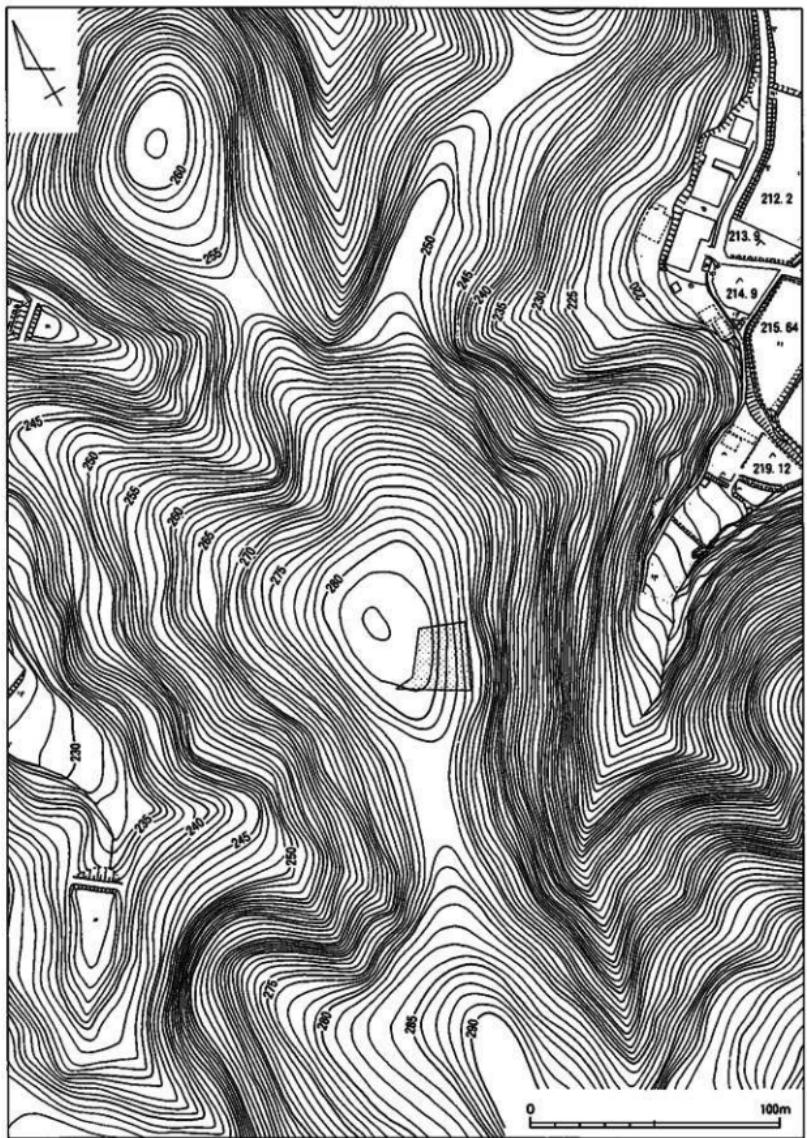
III 調査の概要

北野山遺跡は三次市吉舎町敷地に所在する遺跡である。本遺跡は馬洗川の支流矢井川の西側丘陵の尾根上付近に位置し、現状は山林であった。調査区は東側斜面（標高277～281m）に立地し、周囲の水田との比高は約60mである。

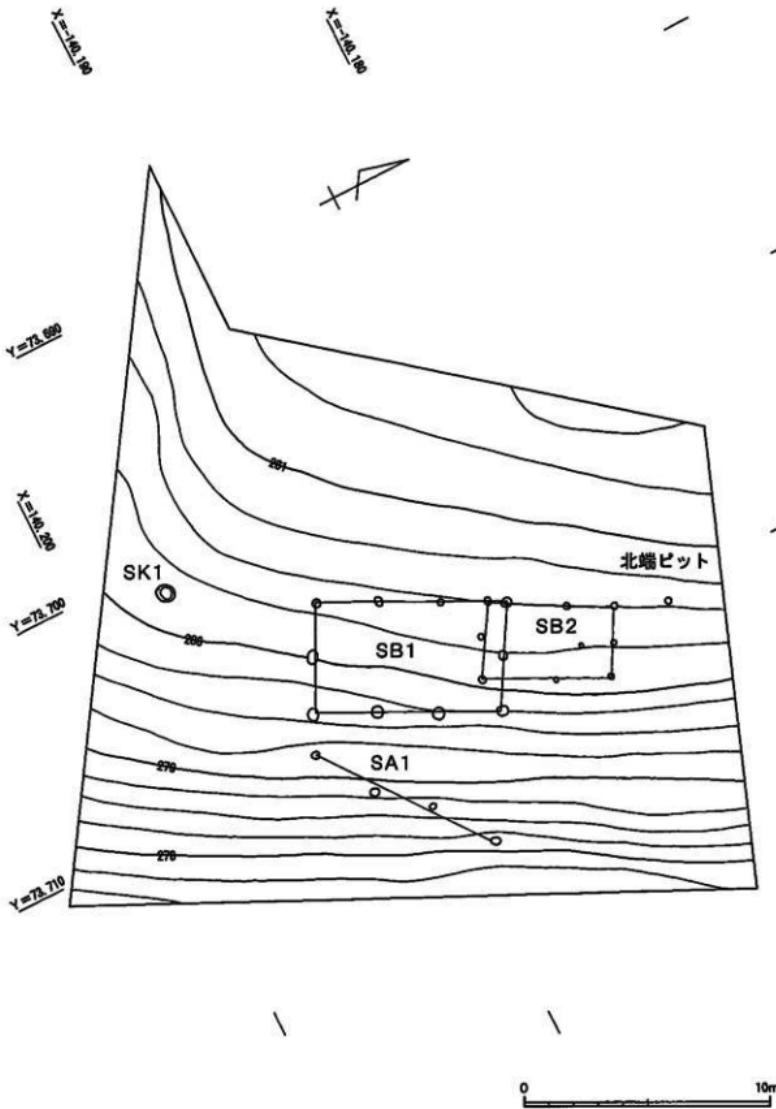
試掘調査の結果、腐葉土直下の黄褐色土層上面が遺構面と考えられた。そこで黄褐色土層上面での遺構検出を行ったが、明確な遺構は検出できなかった。また黄褐色土層は遺物包含層であることから、さらに黄褐色土層を取り除き遺構検出を行った。その結果、地表下30～60cmで掘立柱建物跡2棟（S B 1・2）、柱穴列1列（S A 1）、土坑1基（S K 1）を検出した。出土遺物は、土師器、須恵器、鉄釘、用途不明鉄製品、鉄滓（楕形滓）である。土器類は斜面上位に広く散在していたが、1～2cm大の破片が大半である。比較的大きな破片は調査区中央に位置するS B 1と調査区の南西端中央に位置するS K 1の間でみつかった。なお出土土器類の84%が須恵器で、土師器は16%である（重量比較）。また須恵器の中には鉄鉢形土器、転用硯、煤の付着した杯や器種不明のものが含まれる。鉄製品類では調査区北東端中央に位置する北端ピットから鉄釘が1点出土した。その他の鉄釘、用途不明鉄製品、鉄滓は調査区西端突出部付近の北側（斜面上方）で出土した。出土遺物から遺跡の時期は9世紀後半から10世紀初め頃と考えられる。



調査風景（西から）



第3図 周辺地形図 (1 : 2,000, 網目は調査区)



第4図 造構配図 (1 : 200)

IV 遺構と遺物

1 遺構

(1) SB 1 (第5図、図版2-a・b)

調査区のほぼ中央に位置する掘立柱建物跡である。柱間は桁行3間、梁行2間で、等高線に並行して建てられる。平面形はやや歪み、桁行方向の規模は西辺で7.8m、東辺で7.6m、梁行方向の規模は北辺・南辺ともに4.45mである。北側でSB 2と重複するが新旧関係は不明である。

柱穴は西側の桁行柱穴列を南から北にP 1・P 2・P 3・P 4とし、P 4から時計回りにP 10まで番号を付した。柱間の距離は、桁行方向が2.5~2.7mで、梁行方向は2.15~2.3mである。各柱間距離はP 1-P 2間が2.5m、P 2-P 3間が2.6m、P 3-P 4間が2.7m、P 4-P 5間が2.2m、P 5-P 6間が2.25m、P 6-P 7間が2.5m、P 7-P 8間が2.5m、P 8-P 9間が2.6m、P 9-P 10間が2.15m、P 10-P 1間が2.3mである。柱穴の規模は、西辺の平均が長径35.5cm×短径30.8cm、深さ50.5cm、東辺の平均が長径47cm×短径41.3cm、深さ38.5cm、北辺の平均が長径42.7cm×短径37cm、深さ43.7cm、南辺の平均が長径45.7cm×短径38.3cm、深さ43.3cmである。斜面上方にあたる西辺は、東辺に比較して柱穴の規模は小さいが、深さは深い傾向にある。各柱穴の規模は、P 1が長径33cm、深さ50cm、P 2が長径35cm×短径27cm、深さ62cm、P 3が長径27cm×短径23cm、深さ36cm、P 4が長径47cm×短径40cm、深さ54cm、P 5が長径36cm×短径33cm、深さ39cm、P 6が長径45cm×短径38cm、深さ38cm、P 7が長径44cm、深さ39cm、P 8が長径48cm×短径40cm、深さ35cm、P 9が長径51cm×短径43cm、深さ42cm、P 10が長径53cm×短径39cm、深さ38cmである。なおP 10は北西壁にテラス状の平坦面をもつ。

P 2から土師器が、P 8から須恵器が出土したが、いずれも細片のため図示できなかった。

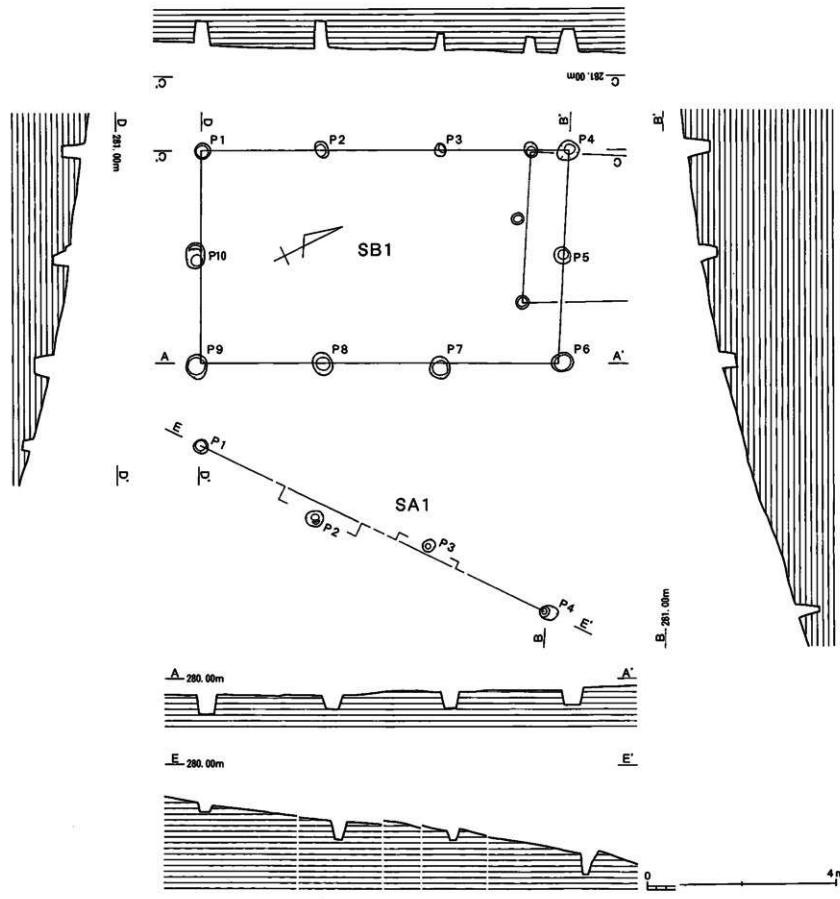
(2) SA 1 (第5図、図版2-a)

SA 1はSB 1の南東に位置する柱穴列である。SB 1の斜面下側にあたり、等高線に対して斜行する。柱穴4基から構成され、全長は8.05mである。柱間距離は2.45~2.85mとばらつきがあり、また4基の柱穴は位置的にふらつきがあるため一直線上には並ばない。

柱穴は南西から北西にP 1・P 2・P 3・P 4と番号を付した。各柱間の距離は、P 1-P 2が2.85m、P 2-P 3が2.45m、P 3-P 4が2.75mである。各柱穴の規模は、P 1が長径31cm×短径27cm、深さ20cm、P 2が長径37cm×短径33cm、深さ39cm、P 3が長径28cm×短径23cm、深さ26cm、P 4が長径40cm×短径30cm、深さ51cmである。なおP 2は東壁にテラス状の平坦面をもつ。

P 4から須恵器が出土したが、細片のため図示できなかった。

SA 1の各柱穴はSB 1の梁行方向の延長上に位置することからSB 1と何らかの関係が想定される。SB 1との距離は、最も近いSB 1 P 9-SA 1 P 1間で1.7m、最も遠いSB 1 P 6-SA 1 P 4間で5.2mである。SA 1はSB 1の桁行方向（等高線と同一方向）に対して斜行して



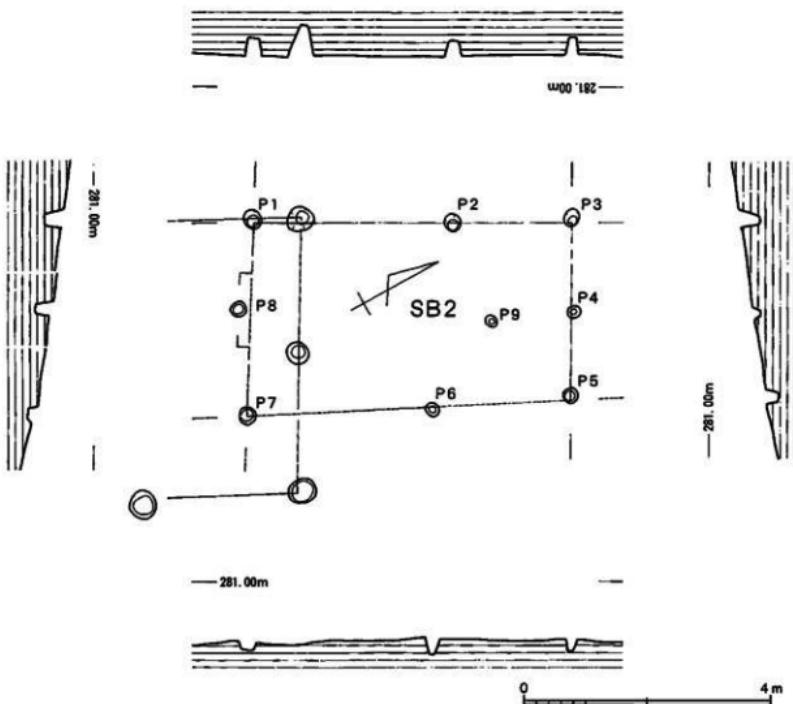
第5図 SB1, SA1実測図 (1 : 80)

おり、造構の性格は不明である。

(3) SB 2 (第6図、図版2-b)

SB 1の北東隣に位置する掘立柱建物跡である。SB 1と一部重複するが、新旧関係は不明である。なおSB 1の西辺とSB 2の西辺がほぼ同一直線上に並ぶことから期間をおかず建て替えられたと考えられる。柱間は桁行2間、梁行2間で、等高線に並行して建てられる。平面形は歪み、桁行方向の規模は西辺で5.2m、東辺で5.3m、梁行方向の規模は北辺で2.9m、南辺で3.1mである。

柱穴は西側の桁行柱穴列を南から北にP1・P2・P3とし、P3から時計回りにP8まで番号を付した。柱間の距離は、桁行方向が1.9~3.3mで、梁行方向は1.4~1.7mである。各柱間距離はP1-P2間が3.3m、P2-P3間が1.9m、P3-P4間が1.5m、P4-P5間が1.4m、P5-P6間が2.3m、P6-P7間が3.0m、P7-P8間が1.7m、P8-P1間が1.4mである。



第6図 SB 2実測図 (1 : 80)

る。柱穴の規模は、西辺の平均が長径29.3cm×短径25.3cm、深さ29.7cm、東辺の平均が径24.7cm、深さ20.3cm、北辺の平均が長径24.3cm×短径21.3cm、深さ20.7cm、南辺の平均が長径27.7cm×短径26.3cm、深さ26cmである。各柱穴の規模は、P 1 が長径31cm×短径27cm、深さ33cm、P 2 が長径29cm×短径26cm、深さ24cm、P 3 が長径28cm×短径23cm、深さ32cm、P 4 が長径22cm×短径18cm、深さ12cm、P 5 が径23cm、深さ18cm、P 6 が径22cm、深さ26cm、P 7 が径29cm、深さ17cm、P 8 が径23cm、深さ28cmである。なお S B 2 内の中央北東寄りに柱穴（P 9）がある。規模は長径22cm×短径17cm、深さ16cmで、性格は不明である。

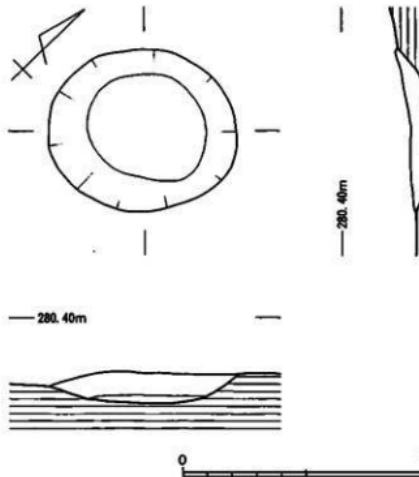
P 9 から土師器・須恵器の細片が出土したが、その他の柱穴からは遺物が出土していない。

（4）SK 1（第7図）

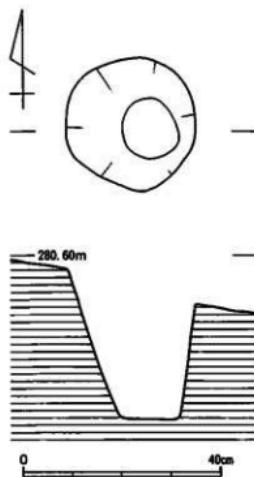
調査区の南西端ほぼ中央に掘り込まれた土坑である。S B 1・S B 2 の西辺を南西方向へ延長した位置にあり、S B 1 から6m、S B 2 から13mの距離である。平面形態は楕円形で、規模は長径76cm×短径65cm、深さ12cmである。底面はすり鉢状を呈し、埋土は炭化物を多量に含む黒灰色土である。壁面や底面には火熱を受けた形跡は確認できなかった。遺物は出土していない。

（5）北端ピット（第8図）

調査区の北東端ほぼ中央に位置するピットで、S B 2 の西辺を北東方向に2m延長した地点である。平面形は円形で、規模は径27cm、深さ31cmである。鉄釘が1点（27）出土した。



第7図 SK 1 実測図 (1 : 20)



第8図 北端ピット実測図 (1 : 10)

2 遺 物

出土遺物は、須恵器、土師器、鉄釘、用途不明鉄製品、鉄滓（椀形滓）である。須恵器、土師器の細片は調査区の西半（斜面上位）に広く散在していたが、比較的大きな破片はSB1とSK1の間で出土した。報告するものはSB1とSK1の間で出土した遺物である。また北端ピット出土の鉄釘（27）1点を除き、鉄釘、用途不明鉄製品、鉄滓は調査区西端の斜面上方で出土した。

須恵器（第9図1～21、図版3）

杯蓋3点、杯11点、皿1点、壺1点、鉢2点、器種不明1点、底部2点がある。

杯蓋（1～3）

1・3は口縁部を欠損するため口径は不明である。1は径5.6cm（推定）の輪状のつまみを貼付けており、つまみの高さは1.0cmで、端部はやや矩形を呈する。内面は滑らかで、全体的に丁寧なつくりである。色調は黄白色である。3は天井部中央が欠損しているためつまみの有無は不明である。天井部の径は11.5cm（推定）を測り、内面は研磨されており、天井部内面を利用した転用硯である。色調は青灰色である。2は復元口径17.4cmで、天井部を欠損する。口縁部にかえりは見られず、端部を丸く納める。内外面とも回転ナデを施す。色調は灰色で、外面口縁端部付近に重ね焼きの痕跡がみとめられる。

杯（4～14）

最も多く出土した器種である。高台がつくもの（4～10）と高台がつかないもの（11～14）に分けられる。なお、全体の形状がわかるものは4・5・11・12の4点で、ほかのものは小片のため全容は不明である。そのため、杯でない器種を含んでいる可能性がある。

高台の形態は、方形状の高台が直立気味になるもの（4・6・7・8・10）、高台が三角形状となり外傾するもの（5）、高台は外傾するが内向きの面を端部にもつもの（9）に分けられる。

4は復元口径17.8cm、器高8.1cm、復元底径9.9cmで、器高が高い。体部は直線的に外上方に延び、口縁部はわずかに外反する。体部は回転ナデ、底部はヘラキリ後ナデを行う。高台周辺は回転ナデを、底部内面には不定方向のナデを施す。色調は淡青灰色である。5は復元口径16.7cm、器高5.8cm、復元底径10.0cm、体部と底部の境が不明瞭で、高台は底部端に貼り付けられる。口縁部はわずかに外反し、体部下半には沈線状のくぼみが3条ほどみとめられる。体部は回転ナデ、底部はヘラキリ後複雑なナデを行う。高台周辺は回転ナデを施し、底部内面には一定方向のナデをわずかに施す。色調は淡青灰色である。6は復元底径9.7cm、高台端部の面がわずかに内側に向く。体部は回転ナデ、底部はヘラキリ後ナデを施したと推定されるが不明瞭である。高台付近は回転ナデで、底部内面には一定方向のナデがみとめられる。色調は外面が暗青灰色、内面は青灰色である。7は復元底径8.4cm、底部中央付近を欠損するため底部の調整は不明である。高台は底部端に貼り付けられる。体部は内湾気味に外上方に延びることから杯でない可能性もある。色調は明青灰色である。8は底径7.3cm、高台端部の面がわずかに外側に向く。体部は回転ナデ、底部はヘラキリ後複雑なナデを施す。高台周辺は回転ナデ、底部内面に回転ナデ後のナデはみとめら

れない。色調は明青灰色である。ほかの須恵器の胎土に含まれる砂粒の大きさは0.5~1.0mmであるが、8の胎土に含まれる砂粒の大きさは1~2mm程度である。9は復元底径9.4cm、高台端部の面が内側を向く。体部は回転ナデ、底部はヘラキリ後ナデ、高台付近は回転ナデを施す。底部内面に回転ナデ後のナデはみとめられない。色調は明青灰色である。10は復元底径6.8cmの小型の杯である。高台は底部のやや内側に貼り付けられる。高台端部の面はわずかに外側を向く。体部は回転ナデ、底部はヘラキリ後ナデ、高台の周辺は回転ナデを施す。色調は青灰色である。

11は復元口径13.4cm、器高2.9cm、12は復元口径13.2cm、器高3.2cmである。11・12の体部は平底の底部から屈曲して外上方に開き気味に延び、口縁端部を上方にわずかに摘み上げて丸く納める。12は口縁端部外面に稜線が入る。底部は回転ヘラキリ後雑なナデ、体部内外面は回転ナデを施す。いずれも色調は明青灰色で、口縁端部外面が青灰色に変色しており重ね焼きの痕跡と思われる。13・14は体部の大半を欠損しており、全容は不明である。13の体部は丸みのある底部から緩やかに外上方へ延びるようである。復元底径8.2cmで、内面の底部・体部と外面の体部の一部に煤が付着することから灯明用として使用した可能性が考えられる。色調は褐白色である。還元焼成が不完全なため土師器に似るが、胎土や調整から須恵器と判断した。なお、底部に丸みがあることから杯ではない可能性がある。14の体部は平底の底部から外上方へ屈曲する。復元底径7.0cmで、底部内面が研磨されていることから転用硯と考えられる。色調は白色であるが、研磨範囲はわずかに赤味を帯びる。

皿 (15)

15の体部は直線的に外方へ大きく開く皿で、口縁部を欠損する。外側に開く高台を有し、端部は丸く納める。内外面とも回転ナデで、底部と体部の境界は不明瞭である。内面が滑らかであることから転用硯として使用した可能性がある。色調は暗灰色である。

壺 (16)

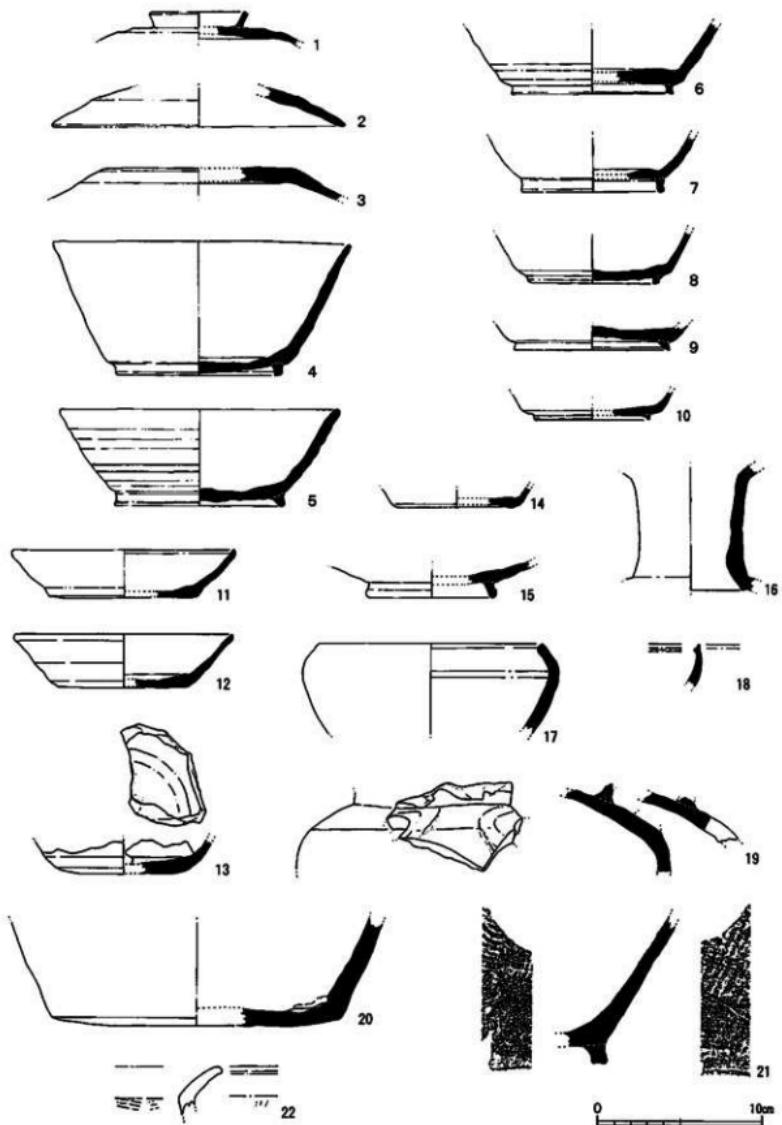
16は頸部の破片である。内外面とも回転ナデを施す。色調は青灰色。自然釉が内面と外面の一部に認められる。

鉢 (17・18)

17は鉄鉢形土器の上半部で、外上方に延びる体部を口縁部は内上方へ屈曲させ端部に内傾する面をもつ。内外面とも回転ナデを施す。復元口径は13.6cm、色調は褐白色である。18は小片のため器種は明確でないが、鉢の口縁部と思われる。体部から口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。この面の両端は内外へふくらむ。内外面ともに回転ナデを施す。色調は明青灰色である。

器種不明 (19)

19は器種不明の肩部片と思われる。肩部上方に断面形状不明の突帯が1条めぐる。突帯の下端に接して複数の注口状の部品がつくが、欠損しており注口状部品の大きさは不明である。肩部に穿たれた穴は長円形で、大きさは長径2.5cm×短径1.7cmと推定される。また穴の周囲には注口状部品を貼り付けた痕跡がみとめられる。わずかに残存する二つの穴の位置から肩部に位置する注



第9図 出土遺物実測図(1) (1:3, 網目は煤付着範囲)

口状部は7か所と推定される。多口瓶とも考えられるが、注口状部が多いことや、突帯付近の器面調整が難なことなどの疑問点があり、器種は不明としておきたい。色調は黄灰色である。

底部（20・21）

20は復元底径17.5cmの平底の底部である。内面は体部と底部の境付近を中心に指頭圧痕がみとめられる。21は高台を有する底部である。高台は方形でやや外傾する。高台の端面はナデによりわずかに窪む。高台付近は回転ナデ、体部外面は格子状のタキを施す。体部内面は同心円状のあて具痕跡が残るが、底部付近はその後回転ナデを施す。色調は灰褐色である。

土師器（第9図22、図版3）

壺（22）

22は口縁部の破片である。頸部で「く」字状に屈曲し、口縁部は外上方へわずかに外反しながら伸び、端部は丸く納める。胴部の張りは弱そうである。口縁部の外面は横ナデ、内面は斜位のナデを施す。頸部の外面は縦位のハケ目、内面は横位のハケ目を施す。色調は茶褐色である。

鉄釘（第10図23～27、図版4）

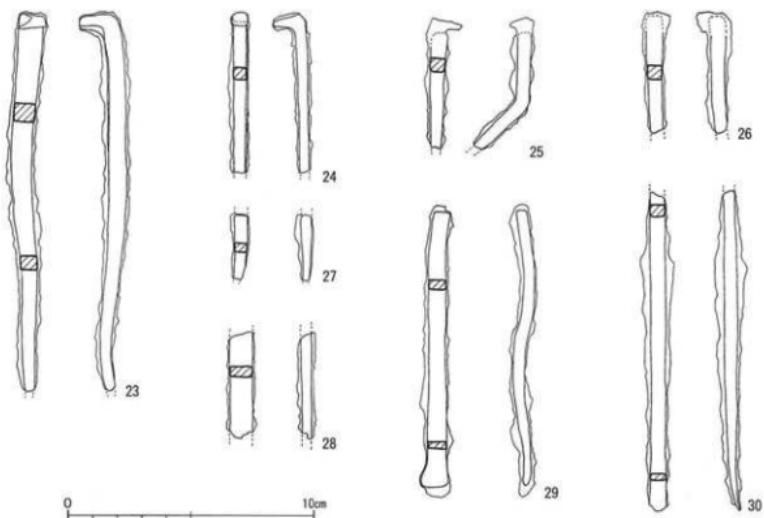
鉄釘は5点出土した。頭側を明確に残すもの2点（23・24）、錆化が著しく頭側の形状が不明なもの2点（25・26）、頭側も先端側も欠損するもの1点（27）である。23・24の頭部はいずれも折頭形である。鉄釘の断面形状は方形もしくは長方形を呈する。25は「く」字状に折れ曲がるが、その他のものはほぼまっすぐである。大きさは23が残存長15.1cm、最大幅1.0cm、24は残存長6.4cm、最大幅0.6cm、25は残存長4.7cm程度、最大幅0.7cm、26は残存長4.8cm程度、最大幅0.7cm、27は残存長2.6cm、最大幅0.5cmである。

用途不明鉄製品（第10図28～30、図版4）

鉄釘に似るが断面形状が扁平な長方形を呈する鉄製品である。29・30の一端は厚さが薄くなるが幅は同一（30）もしくは広く（29）なる。28は残存長4.3cm、最大幅0.9cm、29は長さ（実存では）11.1cm、最大幅1.1cm、30は残存長12.8cm、最大幅0.6cmである。

鉄滓（図版3）

椀形滓が1点出土した。半分を失い、平面形は半円状である。底面は丸みを帯び、砂礫が付着する。表面は滑らかで、黒色地に赤褐色鉄を滲ませる。重量は約420gである。



第10図 出土遺物実測図（2）（1：2）



調査風景（北から）

V まとめ

北野山遺跡は、三次市吉舎町の丘陵頂部に位置する古代の遺跡である。ここでは本遺跡の年代と性格について若干の考察を行い、まとめとしたい。

(1) 北野山遺跡の特徴

立地 丘陵頂部付近の南東緩斜面に位置する。周囲の水田との比高は約60mで、かなりの急傾斜を伴う。山塊が近接するため、遺跡から周辺の水田を見ることができない。

遺構と遺物 遺構は掘立柱建物跡2棟、土坑1基、柱穴列1列である。遺物は須恵器、土師器、鉄製品、鉄滓がある。出土遺物の大半を須恵器が占め、土師器はわずかで、煮炊きする器がほとんど出土していない。須恵器は杯が多く、転用碗や煤が付着したものが見られる。また、鉄鉢形や器種不明の須恵器がある。

遺物の出土状況 斜面上方で鉄釘や用途不明の鉄製品、鉄滓を検出した。また須恵器や土師器の大きな破片はSB1とSK1の間に多く、須恵器の小片は調査区の広範囲にわたり見られた。

(2) 北野山遺跡の年代

県内の古代の土器編年作業は進んでいないのが現状である。比較的まとまって資料が出土した遺跡は、生産地の御調窯跡群（熊ヶ迫窯跡群など）と、消費地の安芸国分寺跡・安芸国分寺東方遺跡などである。これらの遺跡を参考にして、本遺跡で最も多く出土した須恵器の杯と皿の形態により本遺跡の年代を推定する。なお、県内において9・10世紀の実年代の明確な出土資料は知られていない。そのため今後の資料増加により比定時期が多少ずれる可能性はある。

本遺跡出土の杯は高台のつくものと、つかないものの大きく二つに分けられる。前者で全体の器形がわかるものは4・5である。4は器高が高く、口縁部が外反気味にやや開き、高台の断面が方形で直立している。椀形に近いこれらの特徴は、高台では熊ヶ迫第7号窯跡（9世紀前半～中葉）出土の椀、全体の器形では熊ヶ迫第3号窯跡（9世紀後半～10世紀初頭）出土の杯Bや安芸国分寺跡SD220（8世紀末～9世紀後半）出土の杯Bに似る。5は4ほど器高が高くなく、体部には稜線や沈線状のくぼみがめぐる。口縁部は外反気味にやや開き、高台の断面は三角形状となり外傾する。5の類例としては熊ヶ迫第3号窯跡出土の杯Bや安芸国分寺東方遺跡SD01出土（9世紀中葉～後半）の杯がある。高台のつかない11・12は口縁端部をわずかにつまみ上げている。また、11の体部はわずかに内湾する。類例は熊ヶ迫第3号窯跡出土杯Aである。15の皿は高台がつくもので、高台は外側に開き、端部を丸く納める。このような特徴の皿は熊ヶ迫第3号窯跡から出現するもので、それ以前の熊ヶ迫第7号窯跡ではみられない器種である。なお、同様の皿が安芸国分寺跡SD220、安芸国分寺東方遺跡SD01でも出土している。

これらのことから本遺跡の期間は概ね9世紀後半を中心とした時期と思われるが、10世紀初頭頃まで下る可能性が考えられる。杯では形態にかなり相違があった。これらの相違を時期差と捉えるなら、本遺跡の使用は短期間ではないかもしれない。いずれにしても、今後の資料増加と編

年作業の進展を待たなければならない。

(3) 北野山遺跡の性格

本遺跡は丘陵頂部付近の高所に位置しており、一般的な集落とは考えがたい。また、高所ではあるが周囲の水田からはほとんど見えない位置である。古代の山林寺院について考察した吉田美弥子氏はその立地について「標高の低い山の尾根・中腹に立地し、里との比高差もそれほどなく、里に至近の距離に建つ場合や交通路沿いに建つ場合もあるが、人里からは寺の全貌が目視できな⁽¹⁾い。」と指摘していることは示唆的である。また内田律雄氏は、出雲地方の瓦を葺かない小規模な⁽²⁾寺院（村落寺院）の調査例をあげ、神祇祭祀との関係を視野に考察を行っている。この中で、堤平遺跡⁽³⁾をムラから離れた山寺とでもいうべき寺院と捉えている。またオノ神遺跡⁽⁴⁾はムラから離れた郷境と思われる峠に位置することを明らかにし、村落寺院がムラから離れた山林にも存在することを指摘している。

出土遺物に煮炊具がほとんど含まれていないことも、一般的な集落と相違する。また、須恵器では転用硯や鉄鉢形土器、灯明用に使用したと推測される煤の付着した杯などが出土し、これらは仏教関連の遺物と考えられる。さらに19の器種不明の須恵器は、多口瓶のように注口状部が多数あるもので、類例は知られていない。

検出遺構は掘立柱建物跡2棟と土坑1基、柱穴列1列で、一般的な集落で検出する遺構と違ひがない。尾根頂部付近の斜面で鉄釘を含む鉄製品や鉄滓が出土している。尾根頂部で簡単な鍛冶作業を行ったとも考えられるが、尾根頂部の試掘調査では遺構は確認できなかった。

以上のことから本遺跡は9世紀後半から10世紀初頭頃に山林に設けられた仏教関連の施設跡と考えられる。寺院と想定できるほどの遺構や遺物は見つかっていないことから、修行の場であった可能性が考えられよう。しかし、類例が知られていない上に遺構・遺物が乏しいため、施設の具体的な性格は不明としておきたい。

今回の調査で古代の吉舎町の様子が明らかになっただけでなく、古代の村落内における仏教を考える上で貴重な資料が得られた。今後資料が増加することにより本遺跡の時期や性格がより明らかにできるであろう。

註

- (1) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『県営かんがい排水事業（三河地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告（2）熊ヶ迫第4・7・8号窓跡 大蔵第2号窓跡 高岩遺跡』 2002年
- (2) 熊ヶ迫窓跡群の年代比定は向田裕始氏による。
向田裕始「芸備地方における須恵器生産（2）—御調窓跡群の成立と展開—」『研究編録X』 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター 2000年
- (3) 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター『熊ヶ迫第1～3号窓跡 県営かんがい排水事業（三河地区）に係る発掘調査』 1996年
- (4) 註（2）と同じ。
- (5) 財團法人東広島市教育文化振興事業団『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書III—第9次～第11次調査の記録—』 2001年

- (6) 安芸国分寺跡および安芸国分寺東方遺跡の各遺構の年代比定は唐津彰治氏による。
唐津彰治「安芸・備後 9・10世紀の様相」「平安時代前期の土器様相－中國地方を中心－」第4回山陰中世土器検討会資料集 2005年
- (7) 財団法人東広島市教育文化振興事業団「安芸国分寺東方遺跡発掘調査報告書」 1997年
- (8) 註(6)と同じ。
- (9) 吉田美弥子「古代山林寺院の展開」「[坂詰秀一先生古稀記念論文集]考古学の諸相Ⅱ」株式会社匠出版 2006年
- (10) 内田律雄「古代村落祭祀と仏教」「在地社会と仏教」独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 2006年
- (11) 堤平遺跡では、8世紀を中心とした布振り建物跡や掘立柱建物跡が検出された。また、須恵器では鉄鉢形土器及び小型杯がまとまって出土した。後者は「灯明皿型土器」と呼称され、仏教関連の祭祀用具との指摘がある。さらにヘラ書き須恵器、墨書き須恵器、須恵器壺、青銅製容器などが出土した。
島根県教育委員会「堤平遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書8」2002年
- (12) オノ神遺跡は8世紀中葉から10世紀代を中心とした遺跡で、掘立柱建物跡や構、瓦塔埋納遺構を検出した。出土造物は縁軸陶器片、瓦塔、及び須恵質の鉄鉢形土器、須恵器小型皿・杯（いわゆる「灯明皿型土器」）である。
島根県教育委員会「オノ神遺跡 普請場遺跡 島田黒谷I遺跡 一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書9」1995年

参考文献

- 妹尾周三「安芸地域－安芸国分寺出土資料を中心として－」「古代の土器研究－聖武朝の土器様式－」古代の土器研究会 第8回シンポジウム 2005年

a 遺跡遠景（東から）



b 全景
(調査前, 北東から)

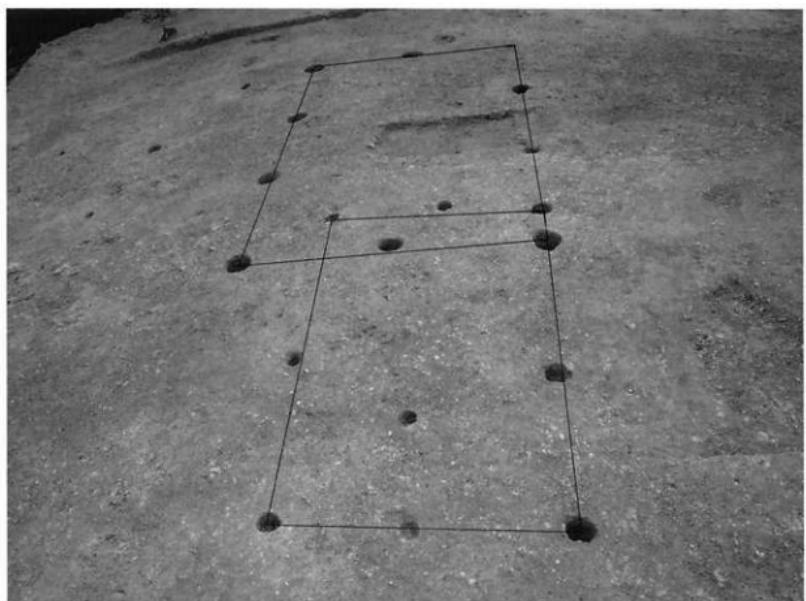


c 同上
(調査後, 北東から)

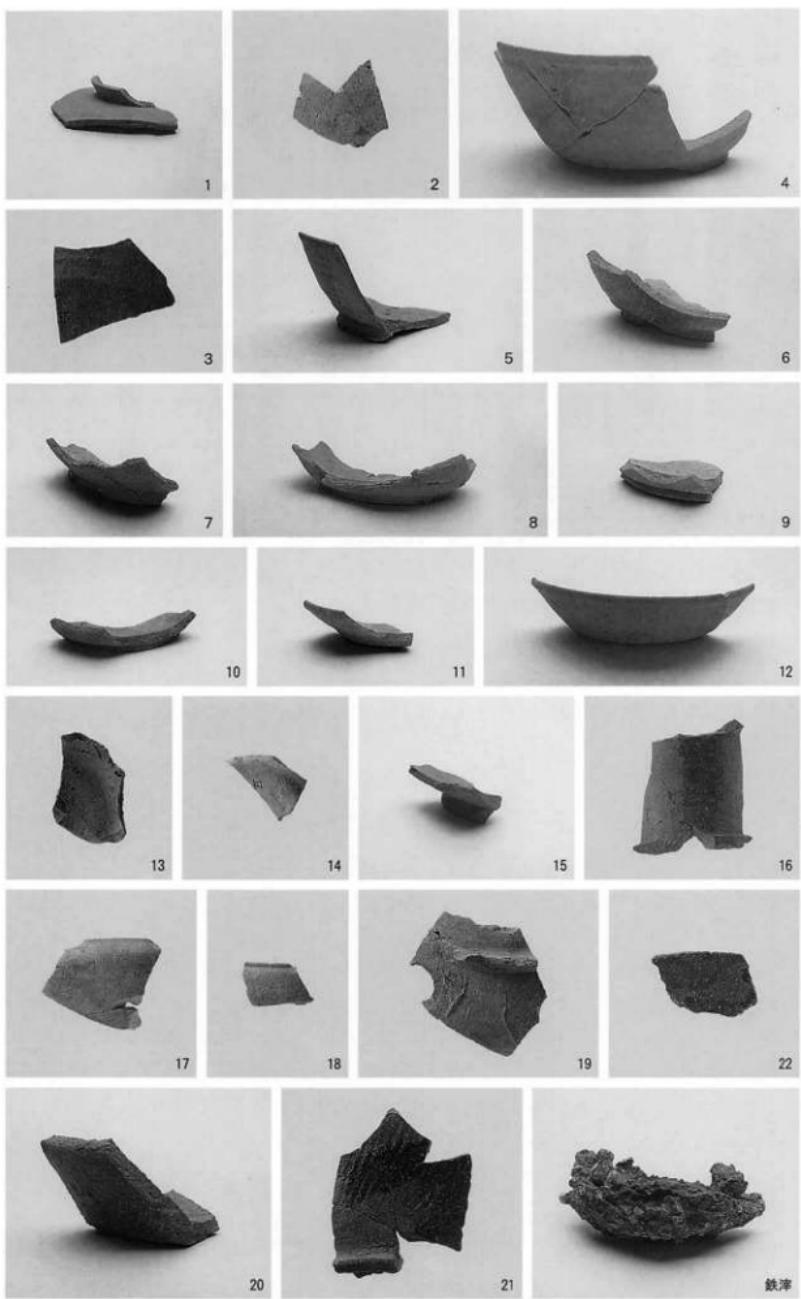




a SB1, SA1 (南西から)

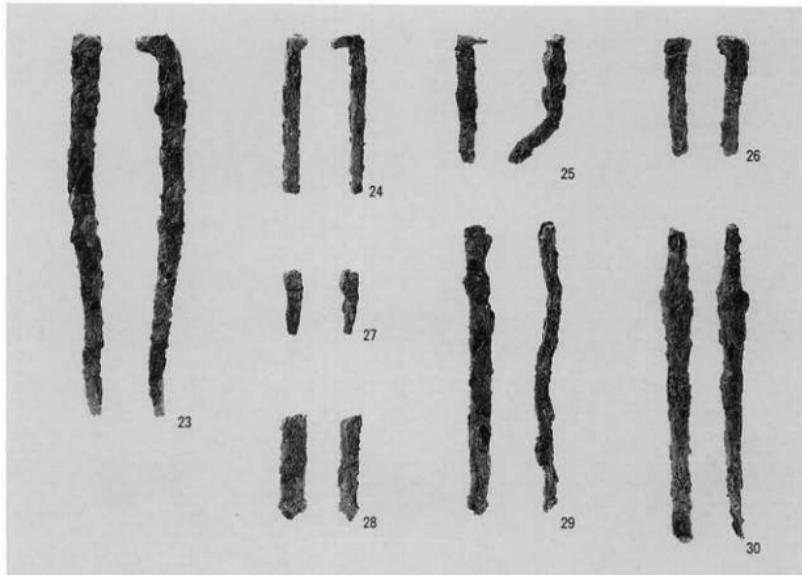


b SB1, SB2 (北東から)



出土遗物（1）

铁滓



出土遺物（2）

報告書抄録

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第27集
中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告（8）

北野山遺跡

発行日 平成21（2009）年3月19日

編 集 財団法人 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号

T E L (082)295-5751 F A X (082)291-3951

発 行 財団法人 広島県教育事業団

印刷所 綾城印刷 株式会社